

呉 蘭 (山形大学)

要旨

本発表では相互性の面から、「讓」構文の特徴を説明し、中国語の典型的な使役マーカー「讓」と「叫」「使」の違いを明らかにすることを目的とする。使役文は大きく「強制使役」「許可使役」「誘発使役」に分けられ、中国語の許可使役には「讓る」という原義から文法化した「讓」が用いられる。「許可使役」は力の行使は双方向なので、「讓」構文は被使役者自身とある状況の外的力との相互作用の結果を表す。その状況は旧情報であるとともに、一言ではまとめられないため、一般的には背景化される。そして、背景化された状況が原因であることを示す付加部（「终于（とうとう）」など）が現れやすい。一方、「呼ぶ」という原義から文法化した「叫」は「強制使役」なので、力の行使は一方的である。そしてもともと使役表現である「使」は「誘発使役」を表し、使役者の働きかけは意図的ではない上に、変化の結果に重きをおく。このため、「叫」「使」いずれも「讓」との互換性がない。

1. はじめに

中国語の典型的な使役文には「讓」構文、「叫」構文、「使」構文があり、いずれも多くの研究がなされているが、(1)–(4)の用法についてはまだ指摘されていない。(1)–(4)は単純な使役文ではなく、主語の代わりに「终于（とうとう）」「没想到还不到一年的时间就…（思いがけず、一年も経たないうちに、もう…）」「不巧（あいにく）」などが現れる。この場合では「叫」「使」は使いにくく、「讓」のみが可能である。本発表では相互性の面からこの違いを説明することを目的とする。

(1) 终于 {讓/??叫/*使} 我等 到 了 这一天。

とうとう {させる/させる/させる} 私 待つ [達成] [完了] この日
(とうとうこの日を迎えることになった。)

(2) 没想到 还 不 到 一年 的 时间 就 {讓/??叫/*使} 他 赶上

思いがけず まだ ない 至る 一年 の 時間 もう {させる/させる/させる} 彼 巡り合う
了 这 次 行动。

[完了] この [量詞] 行動

(思いがけず、一年も経たないうちにこういう行動をとることになった。)

(3) 不巧, {讓/??叫/*使} 他 碰上 了 这 场 瘟疫。

あいにく {させる/させる/させる} 彼 出会う [完了] この [量詞] 疫病

(あいにく彼はこの疫病に出会った。)

(4) {讓/??叫/*使} 他 撞 到 枪 口 上 了。

{させる/させる/させる} 彼 ぶつかる 銃口 上 [完了]

(彼は(怒られて)困った立場に陥った。)

2. 先行研究

「使」は元々の使役表現であり、古代語でも使役に用いるのが普通である（太田 1958: 241）。それに対して、「叫」と「讓」は原義から転じて使役になったものである。

太田 1958: 240-241 は、「叫」は古くは「教」と書き、(5)のように教唆の意から転じて使役になったものと思われると述べている。そして「叫」はもともと呼ぶという意味の動詞であり、(6)のような「…を呼んで…させる」という兼語句に用いられたのち、純然たる使役の意味となった（太田 1958: 241）。

(5) 赵高教其女婿咸陽令閻乐劾不知何人賊杀人移上林。（《史记・李斯列传》；太田 1958: 241）

（趙高はその女婿の咸陽の令閻楽に誰か不明の賊が人を殺して上林に移したと弾劾させた。）

(6) 连忙叫迎儿收拾房中干净。（《金瓶梅 8》；太田 1958: 241）

（いそいで迎児をよんでく迎児に>部屋をかたづけさせた。）

一方、「讓」は(7)で示したように「ゆずる」「すすめる」という意味の動詞であり、(8)のようにその原義から許容の意味に用いることが多い（太田 1958: 242）。

(7) 那佳人讓客先行。（《大宋宣和遺事・亨集》；太田 1958: 242）

（その佳人は客に先を讓って行かせた。）

(8) 讓我拿了镜子再走！（《红楼梦 12》；太田 1958: 242）

（鏡をもっていかせてくれ。）

「叫、讓」と「使」の違いについて、楊凱榮 1989:52 は(9)(10)のように、「叫、讓」は使役者が被使役者に指示、あるいは命令してあることをするようにしむけ、被使役者がその指示に従い自らの意志でそのことを行う場合に用いられるが、「使」は被使役者の動作・作用が使役者の指示や命令による働きかけではなく、使役者の行為を受けた自然な結果によるものであると述べている。

(9) 他 想 去, 我 {讓/叫/*使} 他 去 了。（楊凱榮 1989:52）

彼 たい 行く 私 {させる/させる/させる} 彼 行く [完了]

（彼が行きたがったので行かせてやった。）

(10) 医生 想 尽 了 一切 办法 使 病人 痊愈。（楊凱榮 1989:52）

医者 考える ~し尽くす [完了] あらゆる 方法 させる 患者 全快する

（病人を回復させるために、医者あらゆる手を尽くした。）

楊凱榮 1989:52-55 は具体的には以下の四つの面において異なるという。

第一に、一般に被使役者が動作主（agent）として働く場合、「叫、讓」は用いられるが、「使」は用いられない。「使」は被使役者が経験者（experiencer）として非意志性動詞とともに用いられる。第二に、「使」による使役文は使役者の働きかけが使役者の意図とは関係がないが、「叫、讓」による使役文は使役者の働きかけが意図的である。第三に、「叫、讓」による働きかけは被使役者の状態変化を一つの動きとしてとらえ、その変化の過程に重きをおくのに対し、「使」による働きかけは、被使役者の状態変化を静止したものとしてとらえ、変化の結果に重きをおく。最後に、「使」がもっともよく用いられるのは、使役者が非情物で、被使役者が有情物の場合である。

一方、「叫」と「讓」の違いについては、上述した「使」との間に見られるような大きな違いはないが、(11a)の「叫」は(11b)の訳に対応し、「言い付け、あるいは命令して、～させる」という意味が強いのに対

し、「讓」は(11c)の訳に対応し、「許可して～させる」という意味が強いという（楊凱榮 1989:56）。

(11) a. 听说 他 {叫/讓} 你 去 了。 是 吗？（楊凱榮 1989:56）
[伝聞] 彼 {させる/させる} あなた 行く [完了] だ [疑問]

b. 彼が君を行かせたそうですが、本当ですか。

c. 彼が行ってもいいと許可を出したそうですが、本当ですか。

呂叔湘 1999:303, 461, 494 は使役を表す「叫」「讓」「使」を動詞とし、いずれも「兼語」を付けなければならず、「叫」は「使役」を、「讓」は「使役、許容、放任」を表し、そして「使」は「使役」と「讓、叫」の意味があるという。一方、朱徳熙 1982:241 は「叫」「讓」は両方とも使役、容認、許容の意味を表すといい、この種の形式はいわゆる遞繁式（兼語式）と呼ばれるものに近いが、遞繁式では前の方の動詞が具体的な意味をもつものに対して、このタイプの形式では「叫」と「讓」が前置詞であって、例(12)(13)のように具体的な意味をもたないと主張する。このように、「使」「叫」「讓」を動詞として扱うべきか、前置詞として扱うべきかで主張が分かれている。

(12) 你 也 叫 他 出 去 磨 练 磨 练。（朱徳熙 1982:241）

あなた も させる 彼 出 鍛 える 鍛 える

（あなたも彼を世間に出させて少し鍛えさせなさい。）

(13) 你 讓 我 再 想 想。（朱徳熙 1982:241）

あなた させる 私 また 考 える 考 える

（私にもう少し考えさせてください。）

また、周紅 2005 は「使」「叫」「讓」を動詞とするのに対して、宛新政 2005:67 は前置詞としての「叫」「讓」は「使」と同じ意味であり、基本的には「使」に置き換えられるという。そして、使役文における使役者は願望文などの特別な場合を除いて、空所にしてはならないという（宛新政 2005:94-95）。しかし、上例(1)-(4)は宛新政の主張に対する反例となる。

木村 2000 による分析は楊凱榮 1989 の主張とほぼ一致しているが、中国語のヴォイス表現全体を構造化・カテゴリ化しており、「叫」構文、「讓」構文、「使」構文をそれぞれ「指示使役文」「放任使役文」「誘発使役文」に分類し、以下のように定義している。

木村 2000:20, 22 によれば、指示使役文とは、主語に立つ人物 X が人物 Y に、動作・行為 V を遂行させようとしむける事態を述べる構文であり、放任使役文とは、人物 Y が動作・行為 V を遂行することを人物 X が許容する、ないしは放任するという事態を述べる構文である。一方、誘発使役文とは、無意図的誘発者 X が Y をしてナル的状况 V に至らしめる事態を意味する構文である。木村 2000:26 はこれを次のように図示している。

(14) (I) 指示使役文： \textcircled{X} 叫 \textcircled{Y} A
(II) 放任使役文： X 讓 \textcircled{Y} A
(III) 誘発使役文： X 使 ∇Y S

(14)における○は、当該の人またはモノが何らかの動作・行為を「<スル>主体」であることを示す。指示使役文の場合、それが表す事態は、X の意図的な働きかけに促されて Y が何かをするといったタイプの事態であり、X も Y もいずれもスル主体であるため、ともに○で示されることになる。但し、X の

働きかけが具体的な動作として示されないことがこの種の構文の特徴であり、Yの動作の具体性と区別する意味で、Xについては○と記号化される。▽は、当該の人またはモノが何らかの状態・変化に「<ナル>主体」であることを示す。なお、記号Aは動作・行為すなわち<スル>を意味する述語形式を表し、Sは状態・変化すなわち<ナル>を意味する述語形式を表す。

指示使役と放任使役では、XのYに対する関与の仕方が異なり、前者ではXが積極的に指示する形でYに関与し、後者ではXからは積極的には何もしない、つまりYの行為を何も妨げないことでYに何かをさせようとする形で関与している。前者のXが積極的な使役者であるとすれば、後者のXは消極的な使役者である(木村2000:26)。なお、品詞の面においては、木村2000:21は「叫」も「譲」も動詞としての実義性をすでに失い、<被使役者>を導く前置詞として虚詞(機能語)化しているとする。

最後に、楊凱榮2018は使役を「指示使役」「強制使役」「許可使役」「放任使役」「自発使役」「給与使役」に細かく分類しているが、上海語を中心とする分析であり、「叫」「譲」の品詞には言及していない。

ここまで見てきたように、先行研究では使役マーカーとしての「譲」「叫」「使」の品詞については主張が分かれ、例(1)–(4)の現象についてはまだ考察もなされていない。

3. 本発表の主張

3.1 使役マーカーの範疇

「使」はもともと使役表現であるが、「譲」「叫」は「譲る」「呼ぶ」という原義から転じて使役マーカーになった(ただし、動詞としての原義「譲座(席を譲る)」「叫人(人を呼ぶ)」は失われておらず、両義が共存している)。使役マーカーは使役主という主語を要求し、使役の結果事象を補部にとるという点では高い述語性を持つ。本発表では使役マーカーを使役主と文をつなぐ機能範疇であると考え¹。ここでは仮にVoiceと呼んでおこう。

(15) [VoiceP X_{使役者} [Voice {譲/叫/使}] [s…]]

しかし、この統語構造では使役の機能を十全に説明することができない。上述の通り、使役文は大きく「強制使役」「許可使役」「誘発使役」に分けられる。「John made Mary buy it.」では使役者Johnが被使役者Maryに対して一方的に力を行使する「強制使役」であるが、「John let Mary buy it.」では被使役者MaryがJohnに許可を求めてから使役者Johnがその要求を許可する「許可使役」で、力の行使は双方向である。そして「The heavy snow causes widespread disruption across the UK.」ではThe heavy snowがwidespread disruption across the UKの誘因であり、一方的に力を行使する「誘発使役」であり、被使役者の状態変化を静止したものとしてとらえる。

(15)は原因と結果を結んでいるだけで、これは「誘発使役」の表示としてふさわしい。しかし、「強制使役」と「許可使役」に関しては、特に被使役者に対する力の行使を表示する必要がある。ここでは、被影響性(affectedness)を表す範疇としてApplicativeを設定し、被使役者は文の主語であると同時に、Applicative Phraseの指定部にもあるとする。さらに、許可使役では使役者も被使役者からの力の行使を受けるため、使役者も別のApplPの指定部に置く。

¹ 同様の機能範疇には受動の「被」や処置を表す「把」があると考えられる。

- (16) a. 強制使役：[VoiceP X 使役者 [Voice 叫] [ApplP Y 被使役者 Appl [s Y ...]]
 b. 許可使役：[ApplP X Appl [VoiceP X 使役者 [Voice 讓] [ApplP Y 被使役者 Appl [s Y ...]]]
 c. 誘発使役：[VoiceP X 使役者 [Voice 使] [s ...]]

3.2 使役マーカ－の機能

中国語の場合、許可使役には「讓」のみが用いられる。「讓」の原義は「讓る」である。讓る人と受ける人の間には相互作用があり、力の行使は双方向である。行動を始める人はどちらでもあり得る。たとえば、「讓位（位を讓る）」ではその位がほしい人からの要求に応じる行動でも可能であるし、位を讓る人の自発的な行動でもありうる。そして「讓る」という意味の動詞から、まず(17)のように許可使役を表す機能範疇へ文法化し、さらに使役者からの自発的な行動もありうるので、(18)のように指示を表す強制使役へ文法化してきたと考えられる。そのため、「叫」構文は多少のニュアンスの違いはあるにせよ、ほぼ「讓」に置き換えられる。2節で紹介したように、木村 2000 は「讓」構文は「放任使役文」として、使役者からは積極的には何もしないことで Y に何かをさせようとする形で関与しているから、消極的な使役者であるという。「放任使役文」はその機能ではあるが、「讓」構文は(19)のように強制使役用法もあるので、積極的な使役者である場合もある。

一方、「叫」の原義は「呼ぶ」という一方的な行為であり、「強制使役」を表す機能範疇へ文法化したのが、許可使役の用法はない。(17)のような許可を表す使役なら、「讓」のみがふさわしい。「使」も同様に一方的に力を行行使する「誘発使役」の用法しかもたないから、許可使役の用法はない。

注意されたいのは(17)は使役者である主語が省略された願望文であるが、主語を付けられないわけではないという点である。例(1)–(4)と違い、「你讓我隨便挑一下（あなたは私にすきに選ばせなさい）」のように、使役者主語を付けてもよい。

- (17) {讓/*叫} 我 隨便 挑 一下。(cf. 木村 2000:19)

させる/させる 私 随意に 選ぶ ちょっと

(私にすきに選ばせなさい。)

- (18) 老师 {叫/讓} 小红 念 课文。(cf. 木村 2000:19)

先生 させる/させる 小紅 読む 教科書の本文

(先生は小紅に教科書の本文を読ませる。)

- (19) 我 不 想 去, 他 非 {讓/叫} 我 去。

私 ない たい 行く 彼 どうしても させる/させる 私 行く

(私は行きたくないが、彼はどうしても私を行かせる。)

3.3 許可使役からの拡張

本発表では、(1)–(4)は許可使役の拡張であると主張する。

- (1) 终于 {讓/??叫/*使} 我 等 到 了 这一天。

とうとう {させる/させる/させる} 私 待つ [達成] [完了] この日

(とうとうこの日を迎えることになった。)

- (2) 没想到 还 不 到 一年 的 时间 就 {讓/??叫/*使} 他 赶上
 思いがけず まだ ない 至る 一年 の 時間 もう {させる/させる/させる} 彼 巡り合う
 了 这 次 行动。

[完了] この [量詞] 行動

(思いがけず、一年も経たないうちにこういう行動をとることになった。)

- (3) 不巧, {讓/??叫/*使} 他 碰上 了 这 场 瘟疫。
 あいにく {させる/させる/させる} 彼 出会う [完了] この [量詞] 疫病

(あいにく彼はこの疫病に出会った。)

- (4) {讓/??叫/*使} 他 撞到 枪口 上 了。
 {させる/させる/させる} 彼 ぶつかる 銃口 上 [完了]

(彼は(怒られて)困った立場に陥った。)

(1)は「私」はある状況でチャンスを期待したところへ、ようやく担当者からそのチャンスをもらえたという状況の変化を表すが、この変化は「私」と「担当者」の双方向の作用の結果である。(2)は「彼」がある組織に入って一年足らずのうちに、その組織に緊急事態が起き「彼」に参加させるという事象が起きたことを表すが、これも「彼」と「組織」の双方向性作用の結果である。(3)の「彼」が帰国すると、母国で流行っている疫病に出会ったという事象は「彼」と「母国」の間の双方向性作用の結果である。(4)で機嫌が悪い相手に無鉄砲なことをして相手に怒られて困った立場に陥ったのは「彼」と「相手」の間の双方向性作用による結果である。つまり、いずれも単純に外的力の影響を受けて変化するわけではなく、(20)に示すように被使役者自身とある状況の外的力との相互作用の結果である。その状況は旧情報であるとともに、一言ではまとめられないため、背景化される。そして、背景化された状況が原因であることを示す付加部(「终于(とうとう)」など)が現れやすい。逆に言えば、付加詞によって何らかの複雑だが既知の事情があることを示すことによって、使役者は省略される(ないしは音形の無い使役者で表される)。(1)―(3)ではその付加部がなければ相互作用のプロセスを提示することができず付加部は必須であるが、(4)では「撞到枪口上(銃口の上)にぶつかる」という比喩は危ないものに向けて行動することによって悪い結果をもたらすことを意味しており、この表現自体は被使役者自身と、ある状況の外的力との相互作用を示しているので、付加部はなくてもよい。(1)―(4)はいずれも(21)―(24)のように、使役でなくても同じ意味を表すことができるが、「讓」があれば、被使役者の主体的行為と、その行為から生じた状況の相互作用によって、結果事象が生じたことを示すことができる。

(20) 状況 \longleftrightarrow 被使役者 \rightarrow 結果事象

(21) 我终于等到了这一天。

(22) 没想到还不到一年的时间他就赶上了这次行动。

(23) 不巧, 他碰上了这场瘟疫。

(24) 他撞到枪口上了。

許可使役の「讓」に対して、前述したとおり、「叫」は命令・指示を示す強制使役であり、「使」による使役文では使役者の働きかけは意図的ではない。また、「叫、讓」による働きかけは被使役者の状態変化を一つの動きとしてとらえ、その変化の過程に重きをおくのに対し、「使」による働きかけは、被使役

者の状態変化を静止したものとしてとらえ、変化の結果に重きをおく（楊凱榮 1989）という特徴から、相互性は「叫」「使」にはなく、(1)–(4)では「讓」のみが可能となる。

(25)(26)は一見したところ、「私（たち）」による一方的な活動のようであるが、実際には(1)–(4)と同じく、外的力との相互作用の結果である。(25)では、コロナが収まらない中、会議を予定通りに実施するか、それとも中止するか、もし実施するとすればどのような感染予防対策をとるかなどについて開催者たちが議論し、中止する際には参加者の承諾を得るという開催者と参加者の間の相互作用があり、何らかの手段をとって予定通りに実施する場合には、その手段の提供者などとの間に相互作用がある。(26)は、話し手がずっと相手を信じていたのに、ある事情から相手の正体を見抜いたという文脈である。この場合では実際には、話し手も相手もどちらも積極的ではない。ただ、その事情によって相手が信頼できないという事実で話し手が気づくという、話し手と相手の間の消極的な相互作用の結果と言える。

(25) 终于 讓 我们 想出了 一个 可行性 方案。
とうとう させる 私たち 思いつく [完了] 一つ 実施可能な プラン
(とうとう実施可能なプランを思いついた。)

(26) (ずっと信じていた人に裏切られて)
总算 讓 我 看清了 你的 真面目。
やっと させる 私 見抜く [完了] あなたの 正体
(やっとあなたの正体を見抜いた。)

4. 結論

「讓」「叫」はいずれも本来の動詞から使役マーカーへ文法化したものであり、機能範疇と見なすべきである。「讓」は「許可使役」と「強制使役」いずれも表すことができるが、「叫」と「使」はそれぞれ「強制使役」と「誘発使役」のみを表す。「許可使役」では力の行使は双方向であるので、「讓」構文は「許可使役」の拡張として、被使役者の主体的行為と、その行為から生じた状況の相互作用によって、結果事象が生じたことを示すことができる。それに対して、「強制使役」と「誘発使役」では一方的に力を行使するので、「叫」構文と「使」構文はいずれも相互性を表せない。

【参考文献】

- 宛新政 2005. 『現代漢語致使句研究』 杭州：浙江大学出版社。
太田辰夫 1958. 『中国語歴史文法』 東京：江南書院。
木村英樹 2000. 「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」『中国語学』 247 号。
朱德熙 1982. 『文法講義』 (杉村博文、木村英樹訳) 東京：白帝社。
周紅 2005. 『現代漢語致使範疇研究』 上海：復旦大学出版社。
呂叔湘 1999. 『現代漢語八百詞（増訂本）』 北京：商務印書館。
楊凱榮 1989. 『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』 東京：くろしお出版。
楊凱榮 2018. 『中国語学・日中対照論考』 東京：白帝社。